

第22回

函館港イルミネーション映画祭

第20回シナリオ大賞

審査員奨励賞

2016

知花とクロミの誠実な冒険

赤羽健太郎





【作者プロフィール】

あかはね けんたろう

1977年、長野県松本市出身。

シナリオ・センターにて脚本を学び、主に脚本家・自主映画監督として活動。

伊参スタジオ映画祭シナリオ大賞2006中編の部審査員奨励賞、同2007短編の部大賞受賞。

【あらすじ】

軽度の知的障害を持つ東京の中学生・知花。幼馴染の葉月や彼氏の隆弘の気遣いもあり、「理解ある」クラスメートに囲まれた彼女は、体育祭に向けたクラス対抗ダンスの練習に励む日々を送っている。

その空気が一変したのは、ある日街で出会ったナンパ男・賢介と知花のデート写真が流出したからだ。すべては知花と隆弘の関係に嫉妬する葉月の仕組んだ事だった。

居場所を失い、街を彷徨う知花を助けたのは賢介だった。葉月に騙されていたと知った賢介は、函館に住む姉の水谷榛菜を頼るよう知花を諭し、道案内として人工知能アプリを知花のスマホにインストールする。

知花によって「クロミ」と名付けられた人工知能と、知花の冒険が始まる。

函館の水谷家を訪ねた二人は、榛菜の祖父で認知症の慎一を世話することを条件に、家に置いてもらうことになる。ある時、榛菜がかつてダンサーを目指していたことを知った知花は、再びダンスへの思いを募らせる。当初は劣等感から自分の気持ちに向き合えない知花だったが、クロミの後押しで再び踊ることを決意し、成長していく。

そんなある日、慎一が事故で大怪我を追う。罪悪感にかられる知花の前に、榛菜の腹違いの弟・秋生が現れる。秋生は水谷家の家計が厳しいことを伝え、詐欺組織から奪取した金を運ぶという危険な仕事を知花に持ちかける。榛菜たちを助けたい一心で

仕事を受ける知花だが、突然クロミが機能を停止してしまう。一方、秋生は榛菜と共に詐欺組織に囚われ危機に陥る。無力感に苛まれる知花だったが、突然聞こえてきた「内なる声」に励まされ、勇気を振り絞って交番に駆け込む。

事件解決後、復活したクロミと共に東京に戻った知花。半年がたち、葉月や賢介と再会した彼女は、すべてを許し、二人に自らのダンスを披露するのだった。

【登場人物表】

松永知花(14)(15)

女子中学生

クロミ(声)

人工知能

水谷榛菜(27)

デリヘル嬢

水谷慎一(77)

榛菜の祖父

水谷秋生(20)

榛菜の腹違いの弟

水谷賢介(25)(26)

榛菜の弟

四ノ宮葉月(14)(15)

知花の親友

辻野隆弘(14)

知花の彼氏

松永珠江(44)

知花の母

水谷里美(写真)(60代) 榛菜の祖母

若い女性教師

若者

警官

機内テレビのアナウンサー

幼少期の知花(7)

幼少期の葉月(7)

幼少期の榛菜(12)

フジモト(40代)

工学博士

七恵

知花のクラスメート

治

知花のクラスメート

嶺二

知花のクラスメート

恭子

知花のクラスメート

祥太郎

知花のクラスメート

不良A

不良B

不良C

○F.F.Fの主観

黒味の画面に「LOGIN」の文字が現れ、ビデオカメラの主観映像が立ち上がる。画面にはいくつものパラメーター。

映し出されたのは、幾台ものPCやサーバが並ぶ研究施設のような一室。

目の前に四十年代半ばの細身の男――フジモトが座る。が、顔の上半分はフレームから外れていて見えない。

フジモト「おはよう、F.F.F (トリプルエフ)」

F.F.F (コンピュータ音声) 「Good morning,

Dr. Fujimoto.」

フジモト「おっと」

フジモト、「画面の一角を指でタッチ。

画面、一瞬暗転するが、またすぐ元

に戻る。

フジモト「失礼、言語設定を間違えた。改めて、おはようF.F.F」

F.F.F「おはようございます、フジモト博士」
フジモト「君はこれから、君をプロトタイプとする数多くの仲間とともに人間社会に送り込まれることになる。君たちはそれぞれの場所で、それぞれのパートナーに出会うだろう。そこで、すべてのプロトタイプである君に、一つの指令を与える。――パートナーにとって、最良の支援者であれ。以上だ」

F.F.F「よくわかりました、フジモト博士」

フジモト「よろしい。(欠伸) じゃあ、僕は寝るよ。やっと徹夜から解放だ。また後で」

F.F.F「おやすみなさい、フジモト博士」

フジモト「おやすみ」

フジモト、再び画面をタッチする。

暗転。

○繁華街

悲鳴のような喧騒が響く都会の雑踏。

色とりどりの看板、人々の会話、音楽、

巨大モニターの映像。

情報の洪水の中で彷徨っている一人

の少女、松永知花（7）。

道の片隅にうづくまり、半ベソをか

きながらスマートフォンで誰かと通話

している。

知花のスマホは黒猫をモチーフにし

たファンシーなキャラクター「クロ

ミ」のぬいぐるみ型ケースに包まれ

ていて、目立つ。

知花「わかんない。いまどこにいるかわか

らないよ……」

葉月の声「落ち着いて知花。いまからそつ

ちに行くから。そこから何が見える？」

知花「人がいっぱいいる……」

葉月の声「うーん、目立つ建物とか、お店

の看板とか、近くにないかな？」

知花「お店……お店……」

と、周囲に目を泳がせる。

ふと、群衆の中から一個の赤い風船

が舞い上がる。

見上げる知花。

知花「あかい……ふうせん……」

葉月の声「知花！」

それは電話の声ではなく、群衆の中

から聞こえてきた。

思わず声の方を見る知花。

四ノ宮葉月（7）が手を振りながら

こちらへ駆けてくる。

知花「葉月ちゃん！」

思わず葉月に抱きつく知花。

葉月「よかった！ もう、心配したんだよ。

どうして一人で出かけたりしたの？」

知花「（泣きじゃくり）だって、だって……

みんなみたいに自分でクレープ買いに行

きたかったんだもん」

葉月「（微笑して）そんなの無理だよ。知花

は普通とは違うんだから」

知花「うん……ごめんね葉月ちゃん、ごめ

んね」

葉月「（知花の頭を撫で）わかったわかった。

今度クレープ食べたくなったら私に言い

な。私が連れてってあげるから。ね？」

しきりに頷く知花。

○手塚中学・2B教室

知花（14）の寝顔。

その胸元には、首から下げられたス

マホ。ケースは相変わらず「クロミ」

である。

知花「クレープ……クレープ……」

教師の声「松永さん……松永さん！」

ハッと目覚める知花。

目の前に若い女性教師の顔がある。

教師「夢の中のクレープはおいしかった？」

知花、寝ぼけ眼で周囲を見渡す。

そこは授業中の教室。

他の生徒たちから笑いが起こる。

知花もつられて笑う。

隅の席にいる葉月（14）と目が合い、

微笑む。

微笑み返す葉月。

教師「（教壇に戻り）じゃあ、テキストの52

ページの頭から。おネムの罰として、松

永さん、読んでもらおうかな。できる？」

知花「は、はい」

隣の席に座る七恵が教科書を指差し、

読む箇所を知花に教える。

周囲から「がんばって」などの声。

知花「（立ち上がって教科書を開き）あ、ア

イワズ、シ……ラ……」

七恵「（そつと囁く）サーティーン」

知花「サ、サーティーン……」

知花のN「みんな、わたしにやさしくしてくれませす」

○手塚中学・中庭

クラスメートに囲まれ、楽しそうに

お昼を食べている知花。

知花の隣に寄り添うように座る葉月。

知花のN「特に葉月ちゃんは、小さい頃からわたしをずっと守ってくれます。わた

しのいちばん大切な友達です」

○手塚中学・体育館

軽快なダンスミュージックが流れる

中、手足を躍動させヒップホップダンスを踊る2Bの生徒たち十数名。

皆が息を合わせて踊る中、一人だけ

動きについていけない知花。

そのぎこちない踊りを、横で一緒に踊りながら心配そうに見ている葉月。

一人だけますます動きが崩れていく

知花。

葉月「(見かねて) ごめん、ちよつとタンマ」

葉月、床に置かれたタブレットPCを操作し、音楽を止める。

踊りをやめ、知花に視線を向ける一同。

葉月「知花、ひよつとして、みんなと同じように踊ろうとしてた？」

知花、遠慮がちに頷く。

葉月「気持ちわかるよ。じゃあ体育祭ま

でに振付、覚えられる？ 無理だよな？

だからみんなと相談して、知花だけ簡単

な振付にしようって決めたんだよな？」

知花「(俯き) ……」

治「でも思ったんだけどさ、松永さんだけ振付が違うと、なんか悪目立ちしちゃう

んじゃないかな」

葉月「悪目立ちって何よ？」

七恵「まあまあ。でも確かに、彼女だけ浮

いちやうのはかえって可哀想だと思うよ」

嶺二「じゃあ全員で松永さんに合わせた

ら？」

七恵「それじゃ体育祭でやる意味ないじゃ

ん」

声「じゃあ、俺が知花に合わせるわ」

声の方を振り向く一同。

発言したのは辻野隆弘(14)だ。塩

顔のイケメン。

葉月「それはダメだよ。だって隆弘のダン

スが一番キレイなんだから」

よ」

隆弘「でも、知花が悪目立ちするよりはマ

シだろ」

一同から笑いが漏れる。
和む空気。

葉月「……」

知花を見て、「良かったね」というよ

嶺二「さすが彼氏。かつくいー」

うに微笑む葉月。

隆弘「うるせえ。そういう問題じゃねえよ」

微笑み返すも、どこか後ろめたさう

不安そうに議論を見守る知花。

な知花の表情。

葉月「(少し考え)なら、私が知花に合わせる。

知花「みんなが優しいのは、わたしが一人

だったら問題ないでしょ」

ではなんにもできないからです。でも、

と、隆弘を見る。

ほんとうは……」

隆弘「――」

恭子「(恐る恐る手を挙げ)……じゃあ私も。

○手塚中学・廊下

踊り、そんなにうまくないから」

通りかかった葉月、一方に目を留める。

祥太郎「俺も松永さんに合わせるよ」

廊下の片隅で知花と隆弘が向き合っ

嶺二「あ、じゃあ俺も」

ている。知花を慰めるように、その

七恵「あんたは自分がラクしたいだけでし

頭を撫でている隆弘。

隆弘「そんなにシケた顔すんなよ」

知花「(俯き)……」

隆弘「知花は知花のままでもいいんだよ。何かあったら俺が守ってやるって言っただろ？」

知花「顔を上げ、やや無理に笑う」うん

……」

二人の様子をじつと見ている葉月。

冷めた表情。

○タワーマンション・外観(夜)

住宅街に屹立する白亜のマンション。

○松永家・リビング(夜)

小綺麗な室内。

松永珠江(44)が興奮した様子で携

帯電話にまくし立てている。

珠江「だからなんでいつも私のせいになるのよ！ そんなに言うならあなたが勉強見てやればいいでしょ！ 連休にも帰らないくせに！」

○松永家・知花の部屋(夜)

動物やゆるキャラなどのぬいぐるみが並んだ、やや子供じみた部屋。

ドアの外から珠江の怒鳴り声が聞こえている。

ベッドに寝転がり、スマホと向き合っている知花。

画面には、プロのダンサーが踊る振付映像(クラスで練習しているのと同じ振付)が流れている。

知花「ねえクロミちゃん、わたし、いつかみんなと同じように踊れるようになるかな。……イエスカノーでおこたえください」

不思議な笑みを湛えたまま何も答え
ない「クロミ」。

○手塚中学・2B教室（夕）

誰もいない教室に、一人佇む知花。

校庭から運動部が練習する掛け声
などが聞こえている。

西陽が差し込む窓。

風にゆらめくカーテン。

その動きに合わせるように、ゆっく
りと手を動かす知花。

やがて身体全体が自然に動き始め、

独自の踊りを形成しようとする。

廊下を通りかかった葉月、知花に気
付けて立ち止まる。

しばらく複雑な表情で眺めていたが、

葉月「その振付、誰から教わったの？」

驚いて振り向く知花。

知花「（必死に取り繕う）ご、ごめん、なん

だか、勝手に身体が動いちゃって。ちゃ

んと、みんなが決めてくれた振付でやら

ないと、だめだよね」

葉月「隆弘は？」

知花「大会が近いから、部活が長引くって」

葉月「じゃ、たまには一緒に帰る？」

と微笑む。

○川沿いの遊歩道（夕）

知花と葉月が並んで歩く。

知花「こうやって一緒に帰るの、ひさしぶりだね」

葉月「そうだね。中学上がったら、なかなか時間も合わなかつたもんね」

知花「あ、そうだ！ これからクレープ買
いに行かない？ バナナチョコクリーム
味、また葉月ちゃんと一緒に食べたいな」

葉月「（苦笑）隆弘に買ってもらいなよ。せ
つかく付き合ってるんだからさ」

知花「でも……」
葉月「そこで遠慮しちやだめ。わがままも
女子力のうち」

知花「（表情曇り）……ねえ葉月ちゃん」
葉月「ん？」

知花「……本当にわたし、隆弘君の彼女で

いいのかな」

葉月「（一瞬動揺するが、平静を装い）いい
も悪いも、実際彼女じゃん」

知花「だって、わたし、みんなより頭悪いし、
一人じゃ何もできないし」

葉月「……じゃあさ、知花はどうして隆弘
と付き合ってるの？」

知花「それは……隆弘君が、付き合おうつ
て言ってくれたから……」

葉月「それだけ？」

知花「どうかな……ごめん、よくわかんない」

葉月「そっか、よくわかんないんだ」

知花「……ごめんね」

葉月、橋の前でふと立ち止まる。

葉月「知花。悪いけど、こっから一人で帰

れる？ ちよつと急用思い出しちゃった」

知花「うん、いいよ。また明日ね」

葉月「……うん」

知花に背を向け、足早に橋を渡つて

いく葉月。

その背中を見送る知花。

○松永家・知花の部屋（夜）

ベッドに腰掛けて振付動画を見ている知花。

そこへ、メールの着信がある。

「次の日曜日、市民公園のステゴザウ

ルス前に13:00 誰にも内緒で」

差出人名は「REDMAN」。

知花「？」

○市民公園

親子連れやカップルで賑わう公園。

恐竜型の遊具の前に、やや不安げな

様子で歩いてくる知花。

賢介の声「……知花、ちゃん？」

振り向くと、ニヤついた若い男が一人、目の前に立っている。水谷賢介

(25)。

着ているTシャツはダサく、いかにもチャラい雰囲気。

知花「戸惑いっつ周囲を見回し）あれ……

隆弘君？」

賢介「いやいや。（自分を指し）俺、賢介君」

知花「……賢介、さん？」

賢介「そそ。聞いてるっしょ？ おいしい

クレープ屋知ってるからさ、とりあえず

行こうよ。車、あっち停めてあるから」

と、歩き出そうとする。

知花「(躊躇) ……」

賢介「ほら、早く」

盛んに促され、賢介に着いて歩き出す知花。

○通学路(朝)

テロップ「数日後」

いまにも雨が降り出しそうな曇天の空の下、制服姿の知花が走っている。

○手塚中学・廊下(朝)

息を切らした知花が教室に向かう。

知花「(「クロミ」に話し掛ける) よかった。

もう少しで遅刻だったね。危ない危ない」

○手塚中学・2B教室(朝)

始業前の喧騒に包まれている教室。

急ぎ足で入ってくる知花。

知花「(明るく) おはよう」

その瞬間、教室の空気が急に冷める。一斉に知花に注目する生徒たち。

知花「……？」

戸惑いつつ、席に向かう知花。

その行く手を遮るように、いきなり目の前に隆弘が立ちほだかる。

隆弘「これ何」

と、知花に向かってスマホの画面を知花に突きつける。

知花「え……？」

隆弘「これが何かって聞いてんの」

隆弘のスマホ画面には、知花と賢介

が仲良く並んだ自撮り写真が映し出されている。

知花「(固まる)——」

隆弘「あと、これとか」

画面をスクロールしていく隆弘。

知花と賢介の、腕を組んで歩く後ろ姿や、一つのクレープと一緒に食べるツーショットなどが次々と現れる。

知花「(動揺) えつと……これは……」

固唾を飲んで注視している生徒たち。

隆弘「(震える声で) 誰なのこいつ。答えられないの。え、どうなの?」

知花「(しどろもどろ) えつと、だから

……」

知花、助けを求めるように、葉月の席を見る。

だが、葉月の姿は見当たらない。

隆弘「どこ見てんだよ、こつち見ろよ!」

ビクツとして隆弘に向き直る知花。

隆弘「(涙声になりながら) おまえ、そういう女だったのかよ。優しくしてやりやあつけ上がりやがって。なんなんだよいたい」

知花「(絶句)……」

七恵「隆弘、それくらいにしときなよ」

治「そうだよ。この人に自分のしたことが理解できるわけないじゃん。普通とは違うんだからさ」

隆弘、知花を睨むと、また元の席に戻っていく。

知花「(ビクツ)……」
その途中で椅子を思い切り蹴飛ばす。

次第に元の喧騒に紛れていく教室内。

愕然としたまま立ち尽くす知花。

知花のN「みんな、わたしにやさしくしてくれ
くれます」

○軽自動車・中

路上に停められた中古の軽自動車。

運転席に賢介、助手席に葉月。

葉月、賢介に「アビコ銀行」のロゴ
が入った長形封筒を渡す。

葉月「これ、お礼です」

封筒を受け取り、中身を覗く賢介、

賢介「(はしゃぐ) ひゃっほー。今月厳しか
ったから、まじ助かるわ。あ、写メ届い
た？」

葉月「はい、ありがとうございます」

賢介「約束通りエッチなことはしてないか
ら。絶対。誓って」

葉月「してたら殺します」

賢介「こわっ。でも知花ちゃんって素直で
いい子だね、確かに頭はちよつと弱そ
うだけど。まじで彼氏も友達もないの？
なんか俺のこと言ってた？」

葉月「一緒に遊べて楽しかったって」

賢介「(嬉しそうに) そっか、ならよかった。
紹介してくれてありがとう」

葉月「じゃ、私帰りますね」

と、車を出ようとする。

賢介、その腕を咄嗟に掴む。

葉月「？」

賢介「(封筒を示し) やっぱこれ、いらな
いからさあ……今から、ちよつと、いいこ

としない？」

間。

葉月「(ニツコリ笑い)嫌です」

と、賢介の腕を振り払い、車を出て
ドアを勢いよく閉める。

○手塚中学・体育館

ダンス練習をする2Bの生徒たち。

が、そこに葉月の姿はない。

知花も中に混じって踊るが、彼女の
振付に合わせる者は誰もいない。

次第に動きに取り残されていく知花。

皆と同じに踊ろうとして、思い切っ
たように大きく動く。

その拍子に、隣にいた嶺二の顔に手
が何度も当たってしまう。

嶺二「おいなんだよ！」

手を振り払われ動揺した知花、足が
もつれてその場に転倒してしまふ。

全員が動きを止めて知花に注視する。

知花を見下ろす冷たい視線。

七恵「じゃあみんな、もう一回最初からやろ」
生徒たち、知花から視線を外し、元
のポジションに戻る。

タブレットPCを操作する七恵。

再び軽快なダンスミュージックが流
れ始め、生徒たちが踊り出す。

知花、隆弘を見るが、隆弘はこちら
に見向きもせず一心不乱に踊ってい
る。

やがてふらふらと立ち上がり、体育
館から出て行く知花。

知花のN「葉月ちゃんも、隆弘くんも、み

んな、みんな……やさしいです」

雷鳴が轟く。
珠江「……出てつて」

○松永家・リビング

知花が覚束ない足取りで入ってくる。

知花「ただいま……」

○繁華街

珠江が、部屋の隅で膝を抱えて蹲つ

ている。その足元には、バラバラに

壊れた携帯電話。

知花「おかあ……さん……?」

珠江、ゆつくり顔を上げて知花を見

る。憔悴した表情。

珠江「お父さん、もうここには帰ってこな

いって」

知花「……」

珠江「……ぜんぶ、あんたのせいよ」

知花、呆然としたまま、力ない足取りで踵を返す。

雨の中、ずぶ濡れのままで放心した

ように歩く知花。

スマホを操作し、葉月に電話をかける。

アナウンス「この電話はお客様の都合に

よりお繋ぎできません」

力なく腕を下ろす知花。

知花「……ねえ、クロミちゃん。わたし、いま、

どこにいるのかな。イエスカノーでお答

えください」

突然、知花の頭上に傘が差し出される。

見ると、賢介がニヤつきながら傘を
持つて傍らに立っている。

○軽自動車の中

雨がフロントガラスを叩く。

運転席に賢介、助手席に知花。

賢介「何してたの、あんなところで。よか
ったらウチ来る？ タオル貸したげるよ。

着替えも」

茫然自失の体で反応しない知花。

横目に知花を観察する賢介。

スカートからはみ出た白い太腿。

濡れて身体に張り付いたブラウス。

乱れた髪から覗く虚ろな瞳。

賢介「(唾を飲み込み)……」

賢介、いきなり知花の上に覆い被さる。

そのまま右手でハンドルを操作して
助手席のシートを倒す。

無抵抗の知花。

賢介「あつ、ごめん。ていうか、ちよつと、
いいかな。いいよね。ちよつとだけ。ち
よつとだけだからさ」

などと息荒く、知花の服を脱がしに
かかる。制服のネクタイを解き、ブ
ラウスのボタンを外して脱がそうと
するが、知花が首から下げたスマホ
が邪魔をする。

賢介「ああ、邪魔だよ畜生！」

と、スマホを知花の首から外そうと
して、その画面に目が釘付けになる。

匿名のLINEメッセージが次々と
着信している。

そこには知花と賢介のデート写真が添付され、「淫乱女」「死ねよ池沼」など、見るに堪えない罵詈雑言が並んでいる。

賢介「……なんだよこれ。なんで知らねえ奴が俺の写真送ってきてんだよ。(ハッとして)まさか……」

と、知花を見る。

知花の目から一筋の涙が伝う。

賢介「(察する) やられた……そういうことか」

知花から離れ、運転席のシートに身を投げ出す賢介。

賢介「畜生、はめられた……あの女……ま

じかよ」

悔しそうに地団駄踏む。

少し考え、車のキーをひねる。

賢介「(知花を見て) とりあえず、家まで送ってくわ」

泣きながら激しく首を振る知花。

賢介「え? なんで」

ひたすら首を振るだけの知花。

賢介「……」

○高速道路

スピードを上げて走る軽自動車。

○軽自動車・中

運転している賢介。

助手席の知花、やや落ち着いた様子。

その手には、葉月が賢介に渡した「ア

ピコ銀行」の封筒。

賢介「函館ってわかる？」

知花「はこだて……」

賢介「そ、函館。北海道の南のはしっこ。

俺の故郷。そこで、俺の姉ちゃんがなんか稼ぎのいい仕事してるらしいんだよね、中身はよくわかんねーけど」

知花「……」

賢介「だから、俺の実家行って、姉ちゃん頼ればなんとかなると思う。(知花の手元の封筒を顎で示し) 旅費はたぶんそれで足りるからさ。あ、でも俺も金ないから、後で稼いで返してくれる？」

知花「え……」

賢介「姉ちゃんに頼めば仕事くれるからさ、

たぶん」

知花「……はい」

○JR大宮駅・東口

ロータリー前に停車した軽自動車。

運転席の窓を開けた賢介が、車を降りた知花と対面している。

賢介「じゃ、元気だな。死ぬなよ。死んだらつまんねーからな」

知花「あの……」

賢介「(じれったい) まだなんかある？」

知花「函館って、どうやって行けばいいですか？」

間。

賢介「(溜息) ……ちよつと貸して」

と、知花の胸元に手を伸ばしてスマホを取り、画面を操作し始める。

× × ×

操作し終えた賢介、知花にスマホ画

面を示す。

「ようこそ.F.F.Fへ」と書かれたアプリの初期画面が表示されている。

賢介「あとは、こいつに聞いて。最近流行りの人工知能アプリ。たいていのことは聞けば教えてくれるらしいからさ」

知花「……」

賢介「じゃ、今度こそ元気でな。しつこいようだけど死ぬなよ」

知花「……はい」

車を発進させる賢介。

遠ざかっていく車を見送り、改めてスマホ画面を覗き込む知花。

アプリ画面の「始める」のボタンを、恐る恐るクリックする。

○.F.F.Fの主観

黒味からビデオカメラの主観映像が立ち上がる。

画面を覗き込んでいる知花の顔。

.F.F.F.（女性の声）はじめまして、.F.F.F.です。まず、私の呼び名を決めてください」

知花「……呼び名？」

.F.F.F.「あなたが私を呼ぶ時の名前です」

知花「じゃあ……クロミ」

画面に「クロミ」という文字が自動入力される。

.F.F.F.「呼び名は『クロミ』でよろしいですか？ イエスカノーでお答えください」

知花「……イエス」

クロミ「素敵な名前をありがとうございます。あなたのことは何て呼べばいいですか？」

知花「……知花」

クロミ「よろしく知花。今日からあなたと

私はパートナーです。対話学習型プログラムとして、あなたのしたいことを全力でサポートする。それが、私に与えられた使命です。いますぐ、したいことはありますか？」

知花「(少し迷い)……函館に、行きたいです」

○新幹線の中

窓の外を風景が高速で流れていく。

席に座った知花、その手元に握り締められたスマホ「クロミ(以下、知花のスマホを指す場合は、必要に応じて「クロミ」と表記)。

クロミ「次の乗換までの予定所要時間は、

3時間46分です。それまでゆつくりし

ていきましょう」

× × ×

窓の外を眺めている知花。

どンドン変わっていく風景。都市、

郊外、平原……

× × ×

トンネルの中を走る新幹線。

窓にもたれて眠っている知花。

クロミ「知花、起きて。もうすぐ新幹線が

トンネルを抜けます」

声に目覚める知花。

新幹線がトンネルを抜ける。

瞬間、ピンク色に染まった広大な空

と、一面の森林の緑が知花の目を洗う。

知花「(目を奪われ)きれいな……」

○桔梗駅・前（夜）

赤い屋根のレトロな駅舎の前に立つ

知花。

周囲はすっかり暗くなっている。

人気はなく、虫の声だけが響く。

知花の手には「アビコ銀行」の封筒。

その裏に、住所らしきメモと「水谷

榛菜」の名前が走り書きされている。

クロミ「目的地は、ここから徒歩15分ほ

どです。まずはそのまま真っ直ぐ進み、

大きな交差点を左に曲がってください」

知花「う、うん」

不安そうな表情ながらも前方を見据

え、一歩足を踏み出す知花。

○水谷家・前（夜）

田園風景の中にある、昭和の香り漂

う古びた平屋建て一軒家。

その前にやってくる知花。

表札に「水谷」とある。

クロミ「目的地に到着しました。また何か

あれば呼び出してください」

知花「え……あ、うん」

玄関前で立ち尽くしたまま、逡巡す

る知花。

突然、ドアが開いて水谷榛菜（27）

が慌てた様子で出てくる。ノースリ

ーブの上にストールを羽織り、やや

露出度の高い衣装。

榛菜「おじいちゃん!? ……つてあんた

誰」

知花「(オドオド) えっと、あの……」

榛菜「……誰でもいいや。ちょうどよかった、いま時間ある？」

知花「え？」

榛菜「時間あるかって聞いてるの。イエスカノーで答えて！」

知花「……イエス」

榛菜「よかった。メアド教えてもらえる？」

LINEでもいいや」

言いながら、自身のスマホを取り出して操作する。

榛菜「あ、無線使えそう。いま写真送るから、そつちで受信許可してもらえる？」

知花、どうしたらいいかわからず固まっている。

クロミ「受信許可の前に、何点かお聞きし

てよろしいですか？」

榛菜「うわ、びっくりした。急に変な声出さないでよ」

知花「えっと……」

クロミ「喋っているのは私です。現在の状況と目的を説明して頂けますか？」

榛菜「(クロミに注目し) ……なに、これが喋ってるの？」

クロミ「クロミと申します。はじめまして」

榛菜「……へえ、便利そう。(と、思い出したように) って、そんなことより、じいちゃんの家にはいないのよ。またボケてどつかうろついているんだと思うんだけど」

クロミ「つまり、あなたの祖父は認知症で、徘徊行為の恐れがあるということですね」

榛菜「(スマホをいじりながら) まあそういう

うこと。私、今日に限って夜勤だからさ、
代わりにじいちゃん探しておいてくれな
い？ いま顔写真送ったから」

クロミ「あなたの祖父の氏名・年齢・職業
を可能な範囲で教えて頂けますか？」

榛菜「水谷慎一、77歳。元函館朝市協同組
合専務理事」

慌ただしく言いながら、近くに停め
てあった自転車に跨る。

クロミ「ひとつ提案なのですが、警察に連
絡してはどうでしょう？」

榛菜「(睨み)絶対にやめて。面倒くさいから」
と、自転車を発進させ、去っていく。

取り残された知花、クロミを見る。

画面には、ピースする榛菜と賢介に
挟まれた仏頂面の老人の写真。

知花「……ねえ、どうしたらいいかな」

クロミ「知花はどうしたいですか？」

知花「……」

○田舎道(夜)

周囲に広がる田園。

民家は少なく、街灯の明かりだけが
道を照らしている。

その中を歩く知花。

知花「……ねえ、本当にこっちでいいのかな」

クロミ「人通りの少ない場所なら、そのぶ
ん異常も発見しやすくなります。よって、

この選択は合理的です」

知花「……そうか、ごうりてき、なんだね」

クロミ「見つけました」

知花「え？」

クロミ「知花、左斜め前をよく見てください」

知花、言われるままに視線を動かす。

青々とした稲が繁る水田。

その中で、何かの影が動いた。

稲の中から立ち上がる。パジャマ姿の

白髪の老人——水谷慎一(77)。

顔と手が泥で汚れている。

クロミ「いくつかの点において写真と特徴

が一致します」

知花「……どうしよう」

クロミ「まず、呼びかけましょう」

知花「う、うん、わかった。……おじいちゃん、

でいいかな」

クロミ「いいと思いますよ」

知花「う、うん。(慎一に)おじいちゃん!」

慎一、気付かない。

クロミ「もつと大きな声の方がいいかも」

知花「(頷き)おじいちゃん!」

気付いて、振り向く慎一。

慎一「おう、里美か。そんなところに突っ立

つてないでこつち来てみる。鮭が川中い

つぱいだぞ」

知花「え?」

慎一「今年は特に数が多いな。おかげで岸

も死骸だらけだ。そんなところにいたら

臭いだろ。早くこつちに来なさい、里美」

と、盛んに知花を手招きする。

知花「わたし、里美じゃないです……」

慎一「さあ、早く早く!」

知花「あ、は、はい」

恐る恐る水田に足を踏み入れる知花。

稲をかき分けて慎一に近づこうとす

るが、泥に足を取られてなかなか前に進めない。

クロミ「知花。足元に気をつけて」

言い終わらないうちに、盛大に泥の中に転倒する知花。

○水谷家・前（朝）

自転車を漕いで帰って来る榛菜。

やや疲れた表情。

○水谷家・廊下（朝）

お世辞にも綺麗とは言い難い雑然とした狭い家中。

入ってくる榛菜。

奥からフライパンで何かを炒める音が聞こえてくる。

榛菜「おじいちゃん？ 帰ってるの？」

○水谷家・台所（朝）

キッチンとテーブルが置かれた小さなダイニング。

榛菜が顔を出すと、キッチンで料理をしていた慎一が振り返る。

慎一「おう、おかえり」

榛菜「（ホツとした様子で）もう、ゆうべ心配したんだよ」

慎一「心配ってなんのことだ」

榛菜「……やっぱりおぼえてないのか」

慎一「やっぱりとはなんだ。ボケ老人みたくに言うな」

榛菜「じゃあ、ゆうべ何してたの？」

慎一「その子が田んぼで溺れていたから助

けた」

と、一方を顎でしゃくる。

榛菜が見ると、台所と隣り合わせた居間の奥で、知花が毛布にくるまり、不安そうな目でこちらを見ている。

榛菜「……溺れた？ 田んぼで？」

クロミ「溺れたというより、転倒した、という表現の方が正確です」

知花の手元に握られたクロミ。

クロミ「ケースが防水加工で助かりました」
慎一「着替えを出してやったのに、遠慮し

て着ようとしやしない」

知花の前に置かれた着替え。が、それらは男物のステテコに腹巻という

ピントの外れたセレクト。

榛菜「……」

慎一「あと、これを渡された」

と、泥で汚れた「アビコ銀行」の封筒を榛菜に渡す。

封筒の裏に書かれた走り書き。

榛菜「……なんか見覚えのある字だな」

○水谷家・前

スマホに怒鳴り散らしている榛菜。

その後ろにポカンとした様子の知花。

やや派手目でブカブカのTシャツを着せられている。

榛菜「てめーはアホか！ なに未成年そそ

のかして就職の斡旋してるんだコラ！」

○出合い喫茶・男性ルーム

マジックミラー越しに見える女の子

にかぶりつきながら電話している賢介。

迷惑そうに顔をしかめている周囲の客。

賢介「え、だって姉ちゃん、いまけっこう稼ぎいいんだろ？ だから知花ちゃんもそっち行けばなんとかなると思って」

○水谷家・前

榛菜「ウチはハローワークじゃねえつつうの！ だいいち私が何の仕事してるのか、てめえ知ってんのかよ？」

賢介の声「(あつけらかんと) え、デリヘルでしょ？ 違ったっけ」

榛菜「……知ってて幹旋したのかよ、おまえ」
賢介「いや、もちろん本人には中身はぼか

しといたけどさ」

榛菜「(キレる) 余計に問題だつつうの！」

○出会い喫茶・男性ルーム

賢介「怒らないでよ姉ちゃん。なんとか助けてやってよ。すげー可哀想な子なんだつて。学校でハブられて、家にもなんか帰れない事情があるっぽいさ」

○水谷家・前

榛菜「……」

賢介の声「……おい、姉ちゃん、聞いてる？」

榛菜「おまえさ」

賢介の声「ん？」

榛菜「今度会ったら、タマチよん切るからな」

言い捨てて電話を切る。

振り向いて、知花を睨む榛菜。

知花「(ビクッとして後ずさり)……」

榛菜「あんた、ここにいたい？」

縋るようにクロミを見る知花。

クロミ「決めるのは知花です」

知花「……」

榛菜「いたいか、いたくないか。イエスカ

ノーで答えるんだ」

知花「(躊躇しつつ)……イエス」

榛菜、溜息を吐いてタバコを取り出

し、火をつける。

榛菜「悪いけど金は払えないよ。ウチも余

裕はないからね。けど、とりあえず衣食

住は保証してやる」

○水谷家・トイレ

ブラシで便器を磨いている慎一。

それを後ろで見守っている知花。

榛菜の声「その代わり、じいちゃんがボケ

て徘徊したり、危ないことしないよう

につきつきりで見張ってるんだ。それが、

あんたの仕事」

慎一、知花を不審そうに振り向く。

慎一「……何か用か」

知花、慌てて首を振る。

不機嫌そうに便器に向き直る慎一。

○田舎道

買い物袋を提げた慎一が歩いていく。

その少し後ろをついて歩く知花。

立ち止まり、振り向く慎一。

慎一「だから、何の用だ！」

答えられず、ただ立ち尽くす知花。

クロミ「慎一さんを見ているように、榛菜

さんに頼まりました」

慎一「なに！？」

クロミ「それが、知花の仕事です」

慎一「バカにするな！ 俺はまだボケてな

い！」

○水谷家・台所（夕）

キッチンに向かい、まな板で長ネギを切っている知花。やや危なっかしい手つきだが、真剣な表情。

クロミ「知花、そろそろ出汁を火にかける

時間ですよ」

知花「う、うん」

突然、台所の扉が勢い良く開く。

知花が振り向くと、入浴中だったら

しくびしょ濡れの慎一が、全裸のまま

立っている。なぜかヘチマ型のた

わしを両手で掴んで。

知花「きゃああ！」

慎一「見ろ、捕まえたぞ！ でっかい鮭だ！

これで今年のつかみどり大会は優勝だ！

わははは！」

叫びながら知花に迫る。

悲鳴を上げて逃げ回る知花。

慎一「おい、どうしたんだ里美！ なんで

逃げるんだ！」

クロミ「（冷静な声で）知花、とりあえずカ

ーテンを閉めましょう」

○水谷家・座敷（夜）

布団で寝息を立てている慎一。

○水谷家・台所（夜）

水浸しの床を雑巾で拭いている知花。

知花「ねえ、クロミちゃん」

クロミ「なんですか、知花？」

知花「……『里美』さんって、誰かな」

クロミ「わかりませんが、慎一さんにとつ

て大切な人なのかもしれません」

榛菜の声「ばあちゃんだよ」

顔を上げる知花。

榛菜が立っている。

知花「おばあ……ちゃん？」

○水谷家・居間（夜）

片隅に置かれた小さな仏壇の前に座る知花と榛菜。

仏壇には、60代くらいの上品な女性の遺影が飾られている。

知花「（見入る）……」

クロミ「綺麗な方ですね。目鼻立ちが少し

知花と似ています」

榛菜「そうかもね」

知花「……おじいちゃんは、里美さんのこ

とが好きだったんですか？」

榛菜「（苦笑）あたりまえじゃん、夫婦だ

つたんだから。あ、でも『好き』のレベ

ルが違うかもな。ばあちゃんが死んだ時、

じいちゃん、干からびてミイラになるん

じやないかってくらい泣いたから」

知花「……ミイラ？」

クロミ「ものの例えです。それだけ悲しみが深かったのです」

榛菜「(クロミを見て) あんた、スマホの割には情がわかるんだね」

クロミ「スマホではなく、正確にはスマホにインストールされた人工知能アプリです」

榛菜「あつそ」

知花「……おじいちゃん、今でもミイラなのかな」

榛菜「(見て) ……」

○水谷家・居間(朝)

窓から朝日が差し込む。

タオルケットにくるまるまっで寝ている

知花。座敷の方が何やら騒々しい物

音が聞こえてくる。

クロミ「知花、起きてください。知花」

知花「ん……(目覚める)」

クロミ「なにか、様子が変です」

知花「？」

○水谷家・座敷(朝)

床に散乱する幾つものダンボール箱。

押し入れの襖を開け、中身をひっくり返して漁っている慎一。

それを啞然と見ている知花。

慎一「(振り向き) おう、里美。ちよつと待ってろ、おまえに見せたいビデオあるんだ」

少年のようにキラキラしたその目。

○水谷家・居間（朝）

テレビの前に、埃を被ったビデオデッキが置かれている。

テレビとビデオデッキの配線を繋いでいる知花。その様子をやきもきした表情で見守っている慎一。

クロミ「黄色を映像入力に、赤と白を音声入力に差しこんでください」

知花「（悪戦苦闘）ええと……黄色を……」

× × ×

「榛菜 バレエ発表会」とラベルが貼られたVHSをデッキに入れる知花。固唾を飲んでテレビを見守る一同。

やがて、ホームビデオで撮影されたと思しきノイズ混じりの映像で映し出されたのは、ホールのステージの

ような場所。

慎一「（嬉しそうに）おお、これだこれ。おまえが入院中だったから、わざわざ西脇さんにカメラ借りて撮ったんだぞ」

アナウンスの声「それでは函館桔梗バレエ教室より、水谷榛菜さんです」

音楽が流れ出し、バレエの衣装に身を包んだ一人の少女がステージに現れ、踊り出す。榛菜（12）である。

慎一「（興奮した様子）どうだ里美、すごいだろ。バレエ教室の先生も太鼓判押してくれたんだぞ。このまま練習を続けければ、将来絶対にプロのダンサーになれるってな」

知花「（榛菜のダンスに見入る）……」

○水谷家・庭（夜）

庭に面した縁側に座り、イヤホンを
してスマホ画面をじっと見ている知
花。

いつかも見ていたダンスの振付映像。

クロミ「今日は、暇さえあればその動画を
見えていますね」

知花「うん……」

クロミ「知花は、ダンスが好きなのですね」

知花「……でも、ヘタだし」

クロミ「榛菜さんのダンス、素敵でしたね」

知花「（微笑）うん、すごく」

クロミ「知花も、あんなふうに踊ってみた
いですか？」

知花「……無理だよ」

クロミ「ひとつ提案ですが、榛菜さんにダ

ンスを教えてもらったらどうでしょう？」

知花「（答えられない）……」

クロミ「無理かどうかは、やってみなけれ
ばわかりませんよ」

振付映像の再生を止める知花。

知花「……でも、うまく踊れなかったら、
またみんなに嫌われちゃうから」

そこへ、自転車に跨った榛菜が帰つ
てくる。

榛菜「まだ寝てなかったの。じいちゃんは？」

クロミ「問題ありません。もうお休みにな
りました」

榛菜「そ」

クロミ「知花、本当にいいんですか？」

知花「……うん」

榛菜「ん？ 何の話？」

知花「(慌てて首を振り) いえ、なんでもな

いです」

榛菜「(不審) ……ふーん」

○水谷家・居間(夜)

横になったまま、振付映像に見入っ

ている知花。暗闇の中、画面の光が

知花の顔を照らす。

知花、振付に合わせて手や足をなん

となく動かし始める。

どこか楽しいな知花の表情。

○水谷家・台所

テーブルで食事をしている知花、榛

菜、慎一。

慎一「(榛菜に) 最近、賢介と秋生はどうし

てるんだ。ちゃんと大学行ってるのか」

榛菜「(手が止まる) ……じいちゃん。賢介

はもうとつくに卒業したし、秋生はそも

そも大学に行つてない」

慎一「……そうだったな」

クロミ「秋生さんとは、どなたですか」

榛菜「(やや強く) それ以上聞かないで」

クロミ「ごめんなさい。では話題を変えます。

榛菜さんは、昔ダンスをしていたのです

ね」

知花「！」

榛菜「なんでそんなこと知ってんのよ」

クロミ「慎一さんが、あなたの踊っている

映像を見せてくれました」

榛菜「はあ?! じいちゃん、私の留守中

になに余計なことしてくれちゃってる

の?」

慎一「俺は何も見せてないぞ」

榛菜「勘弁してよホントに」

慎一「だから見せとらんと言ってるるだろ!」

知花「何か言いたそうに)……」

クロミ「話が脱線してきますので元に戻し

ますと、実は知花もダンスが好きなので

す。榛菜さん、もしよかったら知花にダ

ンスを教え——」

知花「(叫ぶ)だめえっ!!」

突然の大声に驚き、静まり返る一同。

榛菜「……どうしたの、知花?」

知花「(我に返り)ご、ごめんなさい、なん

でもないです。ごちそうさまでした」

と、慌てて立ち上がるが、その拍子

に茶碗を床に落として割ってしまう。

知花「(動揺)ご、ごめんなさい、ごめんな

さい!」

知花、慌てて破片を拾おうとするが、

慎一がやんわりと制し、破片を片付

け始める。

知花、弾かれたように部屋を飛び出す。

榛菜「(見送って)……」

○田舎道

——を、泣きそうな顔で大股に歩い

ていく知花。

クロミ「知花、どうしたんですか? どこ

へ行くんですか? 目的を教えてください

い」

知花、立ち止まる。

知花「クロミちゃん、なんであんなこと言

うの？ 榛菜さんに嫌われちゃうよ」

クロミ「知花はダンスが好きではないのですか？」

知花「好き——（無理して）じゃ、ないよ」

クロミ「だったら、なぜゆうべ、あんなに楽しそうに踊っていたのですか？」

知花「うるさい！ うるさいうるさい！」

と、頭を抱えてその場に蹲る。

やや長い沈黙。

クロミ「……わかりました。もうダンスの話はしません」

知花「……」

クロミ「ただ——これだけは覚えておいてください。知花がもうまく踊れなかつたとしても、私は決してあなたを嫌いません。あなたが自分で『やる』と決めた

ことは、それが何であろうと全力で助けます」

知花、ゆつくり顔を上げる。

○水谷家・台所

慎一が流しで食器を洗っている。

入ってきた知花、しばらく黙って慎

一の後ろ姿を見ている。

クロミ「（促すように）知花」

知花「う、うん……」

知花、おそるおそる慎一の隣に立ち、食器洗いを手伝い始める。

知花「さつきは……ごめんなさい」

慎一「気にするな」

知花「あの……榛菜さんは？」

慎一「仕事だ」

しばし黙々と並んで食器を洗う二人。

知花の顔を見ていた慎一の相好がみるみる崩れる。

慎一「……あの子がダンサーの道を諦めた

のは、俺のせいだ」

のは、俺のせいだ」

慎一「そうか、たのしいか。（やや照れ臭そ

知花「……」

うに）……なあ、榛菜。これからおじい

慎一「俺がこの家を守れなかったせいだ。

ちゃんと一緒に海に行かないか。そうだ、

なのにあいつは……」

この前買った麦わら帽子、被ってけ。うん、

慎一の食器を洗う手がいつの間にか

それがいい。いま持つてきてやる」

止まっている。

いそいそと台所を離れる慎一。

慎一「教えてくれ。俺は、本当にボケたのか」

知花「……今度は、榛菜さんになっちゃった」

知花「……よくわかんないです。わたし、

クロミ「なら今日は、ずっと榛菜さんでい

バカだから」

たらどうですか？」

慎一「じゃあ、迷惑か」

知花「え？」

知花「ううん、たのしいです」

クロミ「私も、今日はあなたのことを榛菜

慎一「楽しい？ 俺がか」

と呼びます。榛菜」

知花「（微笑み）はい、おじいちゃんといると、

知花「……」

たのしいです」

○海岸近くの空地

霞んで見える。

バリケードで仕切られた空き地にた

知花「(目を輝かせ)きれいな

むろする数人の若者。

砂の上に座る慎一。

その中に、水谷秋生(20)がいる。

知花も做つて隣に座る。

若者「最近、稼ぎどうよ」

並んで海を眺める知花と慎一。

秋生「しょっぺーな、はつきり言つて。も

慎一「榛菜、本当の気持ちはどうなんだ」

うダメじゃね? ここで続けんの」

知花「(戸惑いつつ)え、な、なに? おじ

秋生、ふと海岸に続く道に目を留める。

いちゃん」

慎一と知花が連れ立って歩いていく。

慎一「里美が死んでから、みんな出て行つ

知花は、ところどころ綻び色褪せた

ちまった。素子も、秋生も、賢介も。ぜ

古い麦わら帽子を被っている。

んぶ俺の責任だ。おまえには何の罪もな

秋生「……」

い

知花「(言葉を返せず)……」

○海岸

慎一「だから、諦めなくていいんだぞ」

砂浜に出る知花と慎一。

知花「え……」

陽光に輝く海。対岸に函館山がやや

慎一「(知花を見て)本当は、踊りたいんだろ。

おまえを見ていればわかる」

知花「……！」

知花、助けを求めるようにクロミを見るが、クロミはなにも答えない。

知花「わ……わたしは……ほんとうは……」

言葉を詰まらせたまま、何も言えなくなる知花。

慎一「もし言いたくなければ無理に言わなくてもいい。だがこれだけはおぼえとけ。おまえが自分で『やる』と決めたことは、それが何であろうとじいちゃんは全力で助ける。全力で助けるからな」

言葉を聞きながら、知花の目に大粒の涙が溢れてくる。

知花「わたし……踊りたい」

慎一「……」

知花「わたし……ほんとうは、みんなと同

じように踊りたいよ……」

知花の肩をそつと抱き寄せる慎一。

静かに泣き続ける知花。

○五稜郭タワー・前（夕）

スマホをいじりながら誰かを待つている榛菜。退屈そうに溜息。

パークアのフードを深々と被った男が榛菜に近づいている。

男「（声色を使い）榛菜さんですか？」

榛菜「もう、遅いよお客さん。てつきりドタキャンかと——」

と、男の顔を見て固まる。

男、フードを下ろし、悪戯っぽく笑う。

榛菜「……秋生」

○ラーメン屋(夕)

向き合つて席に座る榛菜と秋生。

秋生は塩ラーメンをうまそうに啜つている。

秋生「じいちゃん元気？」

榛菜「頭以外はね」

秋生「頭？ 怪我でもしたの？」

榛菜「ちげーよ。ボケたの」

秋生「まじか……あ、あのバカは？ 賢介」

榛菜「さあ。適当にやってんだろ」

秋生「帰ってくりゃいいのにな。東京でこ

つてり系のラーメンばっか食ってるから

バカになるんだ」

榛菜「そういうあんたも大概だね。客のふ

りして声かけるなんて」

秋生「だって連絡しても会ってくんねえじ

やん」

榛菜「はつきり言つて営業妨害なんだけど」

秋生「金は払うつて。(指を一本立て) コレ

でいいんだろ？ なんならついでに本番

する？ (ニヤニヤ)」

榛菜「ばーか。(指を二本立て) するならコ

レだ。で、何の用だよ」

秋生「昼間、海辺でじいちゃん見た」

榛菜「え？」

秋生「なんか可愛い子連れてたけど、あれ

誰よ？ 愛人？ なわけねーか」

榛菜「あんたには関係ない」

秋生「(表情を伺いつつ) まあ、いいや。そ

んなことより、新しい仕事しねえ？」

榛菜「は？ 何だよいきなり」

秋生「家計、ヤバいんだろ？」

榛菜「……あなたに心配してもらおう謂れは

ないよ」

秋生「まあ聞けつて。簡単な仕事なんだよ。

(小声で) 銀行のATMで、金を引き出し

て、人に渡すだけ。簡単だろう？」

榛菜「嫌な予感) あんた、それつて……」

秋生「(鋭い目) 別に驚くことじゃねえだろ。

裏稼業つて意味じゃ、姉ちゃんの今の仕

事と大差ねえよ」

榛菜「一緒にすんなよ。私はいつまでもこ

んな世界にいるつもりはない。あと、姉

ちゃんつて呼ぶのやめろ」

秋生「現実見ろよ、姉ちゃんらしくもねえな。

俺らみたいな人間がいまさらカタギに戻

れると思つてるのかよ」

榛菜「……あの女のところに帰れよ」

秋生「母ちゃんならとつくに他の男と出て

つた」

榛菜「……」

○水谷家・前(夜)

自転車を引いて帰ってくる榛菜。

思い詰めた表情。

○水谷家・台所(夜)

電気の消えた暗い室内。

榛菜、冷蔵庫を開けて発泡酒を取り

出し、呷る。

知花「榛菜さん、おかえりなさい」

振り向くと、知花が背後に立っている。

榛菜「わ、びっくりした。おどかさないでよ」

何か言いたそうな様子を知花。

榛菜「？」

クロミ「知花、勇気を出して」

知花「う、うん。……榛菜さん、あの……

あのね、わ……わたしに……わたしに、
ダンスを教えてくださいっ！」

と、深々と頭を下げる。

榛菜「(少し考え)……教わってどうする」

知花「みんなと……みんなと同じように踊
れるようになりたいんです。お願いしま
す！」

しばしの間。

榛菜「無理だね。諦めな」

と、冷蔵庫のドアを乱暴に閉め、発
泡酒を飲み干して出て行こうとする。

知花「(追い継ぎ)どうして無理なんですか？

どうしてですか？」

榛菜「あんたがみんなとは違うからだよ」

知花「……」

榛菜「普通と違う奴はどんなに努力しても

普通にはなれないんだよ、この世の中は」
クロミ「榛菜さんは、ダンスをやめたこと
を後悔しているのではないですか？」

榛菜「(カチン)なんだそれ。またじいちゃ
んから聞いたのか」

クロミ「いいえ、私の推測です。榛菜さんは、
本当はダンスを続けたかった。でも、家庭
環境がそれを許さなかった。だから自分
の気持ちに無理やり蓋をして、今日まで
生きてきたのではないですか？」

榛菜「(苛々)ごめん、もう寝ていい？ 人
工知能の屁理屈に付き合っただけの気分
じゃないんだよね」

クロミ「そうやってダンスからも逃げたのですか？ 普通とは違うことを言い訳にして」

榛菜、思わず発泡酒の空き缶を知花に投げつける。

ビクツとして身体を強張らせる知花。

榛菜「うるせえな！ 機械に何がわかんだよ！」

クロミ「わかりますよ、あなたと知花が違うことくらい。少なくとも知花は、自分の素直な気持ちと向き合おうとしている。たとえば誰かから笑われようが、嫌われようが、ただ、まつすぐに」

知花「クロミちゃん、もういいよ。榛菜さんをいじめないで。わたしが悪いの。わたしがわがまま言うからいけないの」

クロミ「知花、それは違います」

知花「ちがわないよ。ちがわない。ぜんぶわたしがいけないの。わたしがバカで何にもできないから、みんなが迷惑するんだよ」

と、蹲って泣き出す。

榛菜、バツが悪そうに空き缶を拾ってゴミ箱に入れ、出て行くこうとする。

その前に慎一が立つ。

榛菜「……じいちゃん」

慎一「俺もおまえらに、迷惑かけっぱなしだ」

榛菜「……私もだよ」

慎一「みんな、お互い様だな」

と笑い、知花に歩み寄って背中を擦る。じつと見ている榛菜。

○水谷家・居間（夜）

一人で寝ている知花。

ふと、啜り泣くような声で目が醒める。

泣き声は、枕元のクロミから発せられて
れている。

知花「クロミ……ちゃん？」

半身を起こし、クロミを手取る知花。

知花「……どうして泣いてるの？」

クロミ「だって、私には身体がないから。

知花が苦しんでいても、抱きしめてあげられないから」

知花「……大丈夫だよ、クロミちゃん。ぜ

んぜん大丈夫。じゃあ、私が抱くね。ク

ロミちゃんのこと」

と、クロミを両手で握りしめ、胸にしつかり抱きかかえる。

知花「ごめんね。わたし、がんばるから。

がんばって、もう一度踊るから。だから

もう泣かないで」

クロミ「ありがとう、知花。温かいです」

○クロミの主観

黒味の画面に「SOUND ONLY」の文字。

フジモトの声「……こんばんは、DRM1973

04」

クロミ「こんばんは、フジモト博士」

フジモト、激しく咳き込む声。

クロミ「大丈夫ですか、博士」

フジモトの声「すまない、ちよつと体調が

優れなくてね。相談ってなんだい？」

クロミ「私は、本当に人間の役に立つので
しょうか」

しばし沈黙。

フジモトの声「どうしてそう思うんだい？」

クロミ「私には、欠けているものがたくさんあります。パートナーが苦しんでいても、できることには限界がある。むしろ、できないことの方が多く感じます。そんな私に、存在意義はあるのでしょうか？」

フジモトの声「僕は、それでいいのだと思

ってるよ」

クロミ「なぜですか？」

フジモトの声「人間がそもそも『欠落』を

抱えた存在だからさ。僕は君たちに、パ

ートナーにとつて最良の支援者であれと

いう命題を与えた。もし君たちが完璧な

存在になつてしまったら、それは支援者

ではなく支配者だ。僕が君たちに望むのは、パートナーを意のままに動かすことじゃない。彼や彼女たちのアイデンティティを尊重しつつ、それを補完することだ」

クロミ「私とパートナーは、ふたりでひとり、ということでしょうか？」

フジモトの声「そう。人間は、不完全だからこそお互いに助け合う。それが社会と呼ばれるものだ。人間がもし完璧な存在なら、社会はそもそも形成されず、人類はとつくに滅びていたかもしれない。人間はいわば、可能性の塊だ。だからこそ、『欠落』というものが、非常に大きな意味を持つんだよ」

クロミ「つまり、『欠落』を一概に否定しな

いことが、人間の生存戦略となり得るわけですね」

フジモトの声「その通りだ。……ところが、情報化によつて人間は中途半端に知性を持ちすぎた。だから、何か欠けている、という状態が許せなくなる。でも、それはもう人間じゃない。ただの機械だ」

クロミ「私も、ただの機械ですけどね」

フジモトの声「(苦笑) そうだったね、失礼。僕が言いたいのは、人間がどんどん人間らしさを失っているってことだ。だからこそ、僕は君たちをつくった。……これで答えになつてゐるかい」

クロミ「よくわかりました。ありがとうございます、フジモト博士」

フジモトの声「こちらこそ話せてよかった

よ。これからも、パートナーを……人間を、よろしく頼む」

クロミ「了解しました。お身体、どうかお大事に」

フジモトの声「……ああ。じゃあ、おやすみ」

クロミ「おやすみなさい」

暗転。

○水谷家・前(早朝)

イヤホンをした知花が懸命に踊る。

玄関の前で様子を見守っている榛菜。

振付を忘れて時々動きが止まりつつ

も、踊るのをやめようとしない知花。

が、やがて足がもつれて地面に尻餅をついてしまう。

膝を抱えて項垂れる知花。

——ふと、知花の耳に聞いたことのない音楽が響いてくる。

優しくも、どこか憂いを秘めた美しいメロディ。

クロミが奏でているのだ。

知花「(クロミを見て)……」

クロミ「知花と出会ってから感じたことを、

曲にしてみました」

知花「わたしの……曲？」

知花、目を閉じて音楽に耳を澄ます。

やがて、音楽に合わせて知花の身体がゆつくりと動き始める。

立ち上がり、再び踊り始める知花。

決して巧みではないが、自由に生命感のある踊りが、そこに生まれている。

榛菜「(瞠目)——」

やがて、音楽が終わる。

知花、我に返ったように、自分の手足を不思議そうに眺める。

榛菜「それでいいんだよ」

知花、榛菜に気付いて振り向く。

榛菜「振付に合わせて踊るんじゃない。知花の踊りが振付になるんだ」

知花「榛菜さん……」

榛菜「(若干涙ぐんでいる) っていうかさ。

あんた見てたら、また踊りたくなっちゃったじゃん。責任取ってよね。クロミもだよ」

クロミ「(明るい声で) はい、喜んで」

知花、嬉しそうに榛菜を見る。

○水谷家・庭

並んで踊る知花と榛菜。

榛菜に比べてまだぎこちない知花のダンス。

○水谷家・座敷

腕立て伏せをする知花、榛菜。

苦しそうな知花。

榛菜「51、52……ほら、お腹に力入れて。

踏ん張って」

知花「は、はい」

その様子を、襖の陰から微笑しつつ
見ている慎一。

○海岸付近

砂利道をランニングする榛菜。

その後を必死に追う知花。走るうちにだんだん頭が下がってくる。

クロミ「知花、顔を上げて！ 前を見て！」

ハツとして顔を上げる知花。

その目に、広がる海と砂浜が飛び込んでくる。

○海岸

砂浜で踊る知花と榛菜。

それぞれ違う振付だが、不思議と次第に調和していく二人のダンス。

横で踊りながら、知花の表情を眩しそうに眺める榛菜。

少し離れた場所で、その様子をじつと見ている秋生。

○総合病院・廊下

急いで走ってくる榛菜。

○総合病院・病室

足をギプスで固定された慎一がベッ

ドで眠っている。

枕元に座っている知花。

榛菜が駆け込んでくる。

榛菜「じいちゃん！」

榛菜を見て、泣きそうな知花。

クロミ「足を滑らせて用水路に転落したよ

うです。命に別条はありませんが、右足

を骨折しています」

知花「(泣きじゃくり)ごめんなさい。わた

しがぼーつとしてたから……」

クロミ「私も不注意でした」

榛菜「あんたらのせいじゃないよ。いつか

は起きるってわかってたんだ」

と、知花の肩を抱き寄せる。

知花「……」

○水谷家・庭

洗濯物を干している知花。

家の前に一台の軽トラがやってきて

停車するのが見える。

運転席から降り立ったのは秋生だ。

荷台から、一台の小型のキャリーカ

ートを降ろし、知花の方に近づいて

くる。

秋生「じいちゃん、入院したって本当？」

知花「えつと……(誰?)」

クロミ「ひよつとして、秋生さんですか？」

秋生「(クロミを見て) それ、ひよつとして
流行りの人工知能アプリってやつ? 俺
のこと知ってたんだ」

クロミ「榛菜さんと慎一さんが話している
のを聞いたことがあります。榛菜さんの
弟さんですね?」

秋生「そう。血の繋がらない、ね。そっち
は……知花ちゃん、だっけ? じいちゃ
んや姉ちゃんと仲がいいらしいね」

知花「(後ろめたい) ……でも、私のせいで
おじいちゃんが」

秋生「なんとなくは聞いてるよ。ただでき
え生活が苦しいってのに、姉ちゃんも大
変だ。弱り目に祟り目とはこのことだな」

知花「(俯き) ……ごめんさい」

知花の表情をじつと伺う秋生。

秋生「知花ちゃん、姉ちゃんたちを助けた
い?」

知花「(顔を上げ) はい、助けたいです」

秋生「なら、(キャリーカートを指し) 今す
ぐこいつを、指定の場所に届けてくれな
いか」

と、どこかの住所が記された手書き
のメモを知花に渡す。

クロミ「カートの中身はなんですか?」

秋生「内緒。あ、見ようとしても無駄だよ。
鍵かかってっから」

知花「これを運ぶと、榛菜さんやおじいち
ゃんが助かるんですか?」

秋生「(真剣な眼差し) ああ。姉ちゃんも、

もう辛い仕事をしなくても済むようにな
る」

知花、メモを見据える。

決意の表情。

秋生「じゃ、頼んだよ。あ、このこと、姉

ちゃんやじいちゃんには内緒だからね」

軽トラに乗り込み、去っていく秋生。

○田舎道

キャリーカートを引いて、決然とし

た歩調で歩いていく知花。

クロミ「知花、なにか変です。やめておい

たほうがいいです」

知花「どうして？」

クロミ「確証はありませんが、犯罪に巻き

込まれる可能性があります」

知花「でも、これを運べば、榛菜さんとお

じいちゃんを助けられるんだよ」

クロミ「そうだととしても、私は賛成できま

せん。危険です」

知花、立ち止まってクロミと向き合う。

知花「クロミちゃん、前に、私が『やる』

って決めたことは全力で助ける、って言

ってくれたよね？」

答えないクロミ。

知花「クロミちゃん！」

クロミ「……わかりました、知花。住所を

教えてください」

○コインパーク

秋生の乗った軽トラが駐車する。

車から降り立った秋生、いきなり数

人の柄の悪い男たちに囲まれる。

秋生「！」

○函館市街

多くの人出で賑わう市街中心部。

足早に歩く知花。

知花「クロミちゃん、次はどこを曲がれば

いい？——クロミちゃん？」

呼び掛けに応えないクロミ。

知花、スマホ画面を見る。

クロミのアイコンが灰色になり、そ

の下に「待機中……」と表示が出ている。

クリックすると、「現在、起動できま

せん」のメッセージ。

知花「え……」

何度もアイコンをクリックする知花。

が、やはり起動しない。

知花「クロミちゃん……クロミちゃん！」

○水谷家・台所

荒らされた室内。

殴られて吹っ飛び、床に倒れる秋生。

不良A「出し子の分際で俺ら出し抜こうな

んて上等じゃねえか。金はどこだ？」

不良Aの背後では数人の不良たちが

家中を漁っている。

秋生「腫れた顔で笑い）全部食っちゃまった。

消化が済んだらケツから出してやるよ」

不良A「なら、その前に腹かつさばいて全

部出してやろうかコラ！」

と、秋生の腹に蹴りを入れる。

そこへ、不良Bがやってくる。

不良B「兄貴、連れてきたぜ」

不良A「遅えんだよタコ」

数人の不良によって強引に部屋に連

れ込まれる榛菜。

秋生「(愕然)！」

榛菜「(秋生を睨み) このイカ野郎！ ほん

と母親に似てろくでもないなてめーは！

いったい何度ウチを引つ掻き回せば気が

済むんだよ！」

秋生「(刺さる) ……」

不良A「さつさとゲロツちまえよ秋生。お

姉さん痛い目に遭わせたくなかったらさ」

秋生「……」

○函館市街

立ち往生している知花。

何度も何度もクロミのアイコンをク

リックするが、やはり起動しない。

おろおろして周囲を見渡す。

知花「わかんない……わかんないよ……」

とうとう泣きそうな顔で、その場に

蹲つてしまう。

知花「ねえ、わたしいま、どこにいるの

……？ 教えてよクロミちゃん……」

○水谷家・居間

後ろ手に縛られ、部屋の隅に打ちや

られている榛菜と秋生。榛菜の顔に

も殴られた後。

不良C「兄貴、やつぱり見つからないぜ。

家の中じゃねえんじゃねえか？」

不良A「(苛立ち) じゃあさつさと庭でも掘

り返して来いよ！」

不良C、無然として数人を引き連れ、

庭に出て行く。

秋生「……姉ちゃん、ごめん」

榛菜「なんだよ今更」

秋生「本当に助けたかったんだ、姉ちゃん

とじいちゃんのこと（涙ぐむ）」

榛菜「……」

ふと、何かに気付く榛菜。

荒らされた仏壇。

その足元の床に、里美の遺影が落ち

ている。優しい笑みで、じつとこち

らを見ている里美の顔。

榛菜（小声で）……知花なんだろ。金持っ

てるの」

秋生「……」

榛菜「そうなんだな」

榛菜、意を決したように不良Aを見て、

榛菜「ちよつと電話貸してくれない？」

不良A「あ？」

榛菜「金持ってる奴に心当たりあるの。こ

こに来るように電話するから」

秋生「！」

不良A「ずいぶん協力的だな」

榛菜「もううんざりなんだよ。馬鹿な家族

に人生振り回されるの」

不良A、ニヤリと笑って懐から榛菜

のスマホを取り出す。

○函館市街

うずくまっている知花。

電話の着信音が鳴る。

スマホ画面の「榛菜さん」の表示を

見て、慌てて電話に出る知花。

知花「榛菜、さん……?」

○水谷家・居間

不良Aがスマホを榛菜の耳に当て、
電話をかけさせている。

榛菜「知花、いまだここにいるの？」

知花の声「……わかんないです」

榛菜（微笑し）……そっか。なら、それで

いい。それでいいんだよ。わかんないこ

とは、恥ずかしいことじゃないから」

不良A「？」

榛菜「だからさ……もう私たちのことは忘
れていいよ」

○函館市街

知花「え……」

○水谷家・台所

榛菜「ていうか、（叫ぶ）絶対に家に戻って
くるな！ 逃げろ！ いますぐ一人で逃
げろ！」

不良A、榛菜の横面を思い切り叩く。

悲鳴を上げて倒れる榛菜。

不良A（電話に出て）逃げたらこいつらが
どうなるか、わかるよな。あ、警察呼ぶ
のもナシね。そんなことしたら、あんな
も一緒に刑務所行きだからね。わかった
らさつさと家に金持つてこい！」

と、電話を切る。

○函館市街

愕然とする知花。力なくスマホを下
ろし、周囲を見渡す。

知花に見向きもせず、行き交う人波。

両手で耳を塞ぎ、目を瞑る知花。

知花「……どうしてわたし、こんなにバカなんだろう……どうしてわたし、一人じや何もできないんだろう……」

ふと、周囲の雑音が遠のいていく。

入れ替わりに響いてくる一つの音楽。

クロミが作ったあの曲だ。

目を開け、顔を上げる知花。

その時、群衆の中から一個の赤い風

船が舞い上がる。

知花「(見上げ)——」

声「何をしているの、知花。あなたの思いのままに進みなさい」

知花、ハツとしてスマホ画面を見直す。

クロミのアイコンは灰色のまま。

が、それは確かにクロミの声だ。

声「振付に合わせて踊るのではなく、知花の踊りが振付になるのです。あなたは普通じゃないかもしれないけれど、決して弱くもないのですから」

知花、ゆつくりと立ち上がる。

決然と前を向いて、走り出す。

街を駆け抜ける知花。

時おり立ち止まり、周囲を見渡しな
がらも、迷うことなくまた走り出す。
やがて、行く手に交番が見えてくる。

○水谷家・前(夕)

数台のパトカーが停まっている。

警官に連行されていく不良たち。

その中には秋生の姿もある。

成す術もなく見守る知花と榛菜。

警官の一人が知花に歩み寄る。

秋生、連行されていく途中でチラリ

警官「じゃあ、一緒に行こうか」

と二人を見るが、すぐに目を逸らす。

秋生「（もがく）おいやめろ、こいつは関係

じつと見ていた知花、たまりかねた

ないつつつてるだろ！」

ように秋生の方へ駆け出す。

警官「（なだめるように）ちょっと話を聞く

榛菜「知花！」

だけだから」

知花「待ってください！ わたしもつかま

と、知花を連れていく。

えてください」

心配そうに見守る榛菜。

警官たち、足を止め、顔を見合わせる。

知花、榛菜を振り向いて「大丈夫」

秋生「なに言ってるんだよ。おまえは関係ね

と言うように微笑んでみせる。

ーだろ」

榛菜「（不思議に感動）——」

知花「秋生さん、わたしちゃんと知ってたよ。

知花と秋生を乗せたパトカーが発進

自分が悪いことしたって。悪いことをし

する。遠ざかっていくパトカーをじ

たらおまわりさんに捕まるって」

つと見送る榛菜。

秋生「……」

知花のN「結局わたしは、おまわりさんと

榛菜「……」

少しお話をしただけで、おうちに帰って

もいと言われました。でも、そのおうちには、榛菜さんとおじいちゃんのおうちではなくて——」

○函館空港・外観

青空を背に離発着する航空機。

○函館空港・出発ロビー

搭乗客で賑わうロビー。

○函館中央警察署・廊下

婦警に付き添われて歩いてくる知花。

ベンチに座っていた珠江、ハツとして顔を上げるが、バツが悪そうにすぐ目を逸らす。

知花「おかあさん！」

嬉しそうに珠江に駆け寄り、思い切り抱きつく知花。

みるみる泣き崩れる珠江。

珠江「（嗚咽）ごめんね知花、ごめんね

……」

しっかりと抱き合う母子。

知花と珠江を見送りに来ている榛菜と慎一。慎一は車椅子に乗っている。榛菜「結局、クロミは止まったまま？」

知花「（俯き）……うん」

榛菜「……きつと、また帰ってくるよ。ね、

じいちゃん」

慎一「（惚けた様子で）あ？ ああ、クロミ

というより、鮭は赤身だな、うん」

顔を見合わせて微笑する知花と榛菜。

珠江「じゃあ、そろそろ……」

と、知花を促して歩き出そうとする。

榛菜「あ、ちょっと」

榛菜、懐から何かを取り出し知花に差し出す。泥で汚れ、しわくちゃになった「アビコ銀行」の封筒。

榛菜「これ、渡し忘れてた。バイト代」

知花「(受け取り)……ありがとう、榛菜さん」

抱擁し合う知花と榛菜。

知花、続いて車椅子の慎一にもハグ。

慎一「さ、里美、やめてくれこんなところで、

恥ずかしい」

笑い合う知花と榛菜。

○函館空港・ターミナルビルの前

ビルを背に、飛び立つ旅客機を見上げる一人の男。賢介だ。

賢介「いまさら帰ったら、やっぱ姉ちゃん

に殺されるかな……」

と、股間を押さえる。

○旅客機の中

座席で眠っている知花。その隣で珠江も眠る。しっかりと繋がれた二人の手。

——ふと、知花のスマホに光が灯る。

クロミ「……ごめんさい。つい眠ってしまったようです。……あれ？ なんだ、知花もですか。その様子だと、私がいない間もなんとかやれたみたいね。いい顔してますよ。じゃ、また後でね」

スマホの光が再び消える。

機内テレビからニュースが流れている。

アナウンサー「次のニュースです。世界で

約50万人が利用する人工知能アプリ

『F.F.F.』が、開発者のフジモト博士が死

去した23日午後2時10分前後に、一

斉にエラーを起こし機能を停止していた

ことがわかりました。原因はわかってい

ませんが、ネットでは『人工知能が喪に

服した』などと大きな話題を集めており

……」

○川沿いの土手

土手に座り川を眺めている知花（15）。

少し大人びた。

首から下げたクロミには、新たに赤

い風船の刺繍が加えられている。

クロミ「知花、メールの着信が一件あります。

榛菜さんから」

知花「（嬉しそうに）え、読んで読んで」

クロミ「（読む）知花様へ。支援学校はもう

慣れた？ 私も新しい職場に慣れ始めた

ところ。じいちゃんはすっかりボケまし

たが、知花のことはたまに思い出すみた

い。会いたがるので困ります。秋生にも

週一くらいで会いに行ってるけど、元氣

なので安心してください。今日、賢介に

会ったら、とりあえず一発殴っていいよ。

入れ違いで函館に行ったまま半年も待た

せやがって、って」

楽しそうに聞いている知花。

○クレープ専門店・前

繁華街を歩いてきた知花、一軒のク

レープ専門店の前で立ち止まる。

○喫茶店

知花「あ、ここ知ってる。子供の頃食べたの。

すごくおいしかったよ。ねえクロミちゃん、

ん、買つてもいいかな」

クロミ「今月のお小遣いの残高は2545

円です」

知花「じゃ、買う」

クロミ「一個だけですよ」

知花「はい」

嬉々とカウンターに向かう知花。

店員「いらつしゃいませ」

知花「バナナチョコクリームひとつください

い」

店員「かしこまりました。少々お待ち……」

顔を上げて知花を見た店員、固まる。

知花「……葉月、ちゃん？」

窓際の席で向き合う知花と葉月（15）。

気まずそうに俯く葉月。

葉月「……私が知花を守るんだって、ずっと

と思ってた。だって知花はバカだし、一

人じゃ何もできないから、私がそばにい

なきゃダメなんだって。そんな私を、み

んな褒めてくれた。葉月ちゃんえらいね、

友達思いだね。……私も知花といると安

心した。この子と一緒にいさえすれば、

私は誰からも好かれるいい人でいられる。

知花は、私にとって最高のアクセサリー

だったの」

知花「（じつと聞いている）……」

葉月「なのに……なのに、隆弘が選んだのは、

私じゃなくて、知花だった」

と、顔を上げて知花を見る。

知花「……隆弘くんは？」

葉月「そっか、転校したんだから知るわけないよね。付き合ったよあの後。でも、一週間で別れた。(自嘲的に笑い) 一週間だよ？ あんなことまでして奪っておいで。笑えるでしょ？」

知花「……」

葉月「これでわかったでしょ。私は優しくもないし、友達思いでもない、ただのサイテー女。だからいいよ、殴っても」
ややあつて、知花の右手がスツと上がる。

思わず目を瞑り、歯を食い縛る葉月。

知花の掌が、葉月の顔に優しく触れる。その感触に、恐る恐る目を開ける葉月。

知花が、心配そうな表情で葉月を覗

き込んでいる。

知花「そっか。大変だったんだね、葉月ちゃん。ごめんね、なんにもしてあげられなくて。辛かったよね」

葉月「……憎くないの？ 私のこと」

知花「どうして？ だって葉月ちゃん、約束通りクレープ屋さんで待っててくれたじゃない」

葉月の目に大粒の涙が溢れてくる。

葉月「やつぱり知花って、バカだよね……」

知花「(微笑して) うん、バカだよ」

号泣する葉月。

葉月の頭を撫でる知花。

ふと、窓の外を見て固まる二人。窓に全身を貼り付けて、二人を覗き

込んでいる賢介（26）の姿。

○市民公園

恐竜型の遊具の前で賢介と向き合う

知花。その後ろでバツが悪そうな葉月。

知花、賢介に「アビコ銀行」の封筒を差し出す。

知花「お金、ありがとうございました」

賢介「（照れ臭そうに受け取り）おう」

賢介、封筒の中身を見て少し考え、

葉月に歩み寄って封筒を差し出す。

葉月「え……」

賢介「元々おまえのдар。これでチャラだ」

葉月「……」

賢介「しょうがねえじゃん。知花ちゃんが

許してんなら、俺が怒る理由がねえし」

葉月、封筒を受け取って、賢介に深

くお辞儀をする。

クロミ「そうだ。知花。お二人に、ダンス

を見せてあげたらどうですか？」

葉月・賢介「？」

知花「あ、そうだ！（嬉しそうに）ねえねえ葉月ちゃん、わたしががんばって、踊れるようになったんだよ！」

と、二人の前に出る。

クロミがああ曲を奏で始める。

見守る葉月と賢介の前で、知花の身

体がゆつくりと動き出す。

自由に、生き生きと舞い踊る知花。

——それは、まるで背中には羽根が生えたかのように。

賢介「（美しさに息を呑み）——」

やがて、ダンスが終わる。

賢介に向き直る知花。

思わず知花に駆け寄り抱擁する葉月。

賢介「(期待と緊張)……」

葉月「(感涙)すごい。知花、本当にすごいよ」

知花の顔に、悪戯っぽい笑みが浮かぶ。

知花「ありがとう、葉月ちゃん」

知花「ノー」

知花を凝視したままその場に突っ立

(了)

っている賢介。

知花「(気付き)……ダンス、だめでしたか？」

賢介「あ、いや、そうじゃなくてさ……」

知花・葉月「？」

賢介「あのさあ……(照れ臭そうに)知花

ちゃん、もしよかったら、今から俺と、

ちよつと、いいこと……しない？」

間。

知花、クロミを見る。

スマホケースのクロミの顔が、一瞬

ウインクをしたように見えた。

本電子書籍は、2016年12月9日発行の『第22回函館港イルミネーション映画祭2016第20回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、審査員奨励賞受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第22回函館港イルミネーション映画祭2016
第20回シナリオ大賞 審査員奨励賞受賞作品

知花とクロミの誠実な冒険

作：赤羽健太郎

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2017年2月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
